

昭和二十年に麻山で自決された方々の三十三回忌なので、五十二年三月に東京桜ヶ丘の一角に建っている哈達河開拓慰霊碑の前で法要が行われ、主人と二人で参加いたしました。貝沼团长以下四百余人のご冥福をお祈りに、生き残りの方々が集まり、当時の思い出や、終戦の悲しい思いを語り合いました。

私たち生存者は、大陸に眠る人たちの供養をできるかぎりしようと誓いあつて別れました。

少年義勇軍の思い出

富山県 今川 長門

学校卒業後のことについて、いろいろと思索していた矢先、担任の先生から、君は義勇軍に入らないかと話を持ちかけられ、その概略についても説明してくれ、なんのためらいもなくよしそれだ。

それもその筈、私は六男坊だ、いつまでも甘えておれぬ身、このことも大きく左右した。その胸裏には服

装はりりしく恰好の良い、そして立派な学校のような宿舍で軍隊につぐものと一人合点、両親の説得も馬の耳に念仏、試験に備えてある程度勉強もしたが、試験の全く幼稚なことにいささか、がっかりしたもの合格は合格だ。

昭和十三年五月、村あげての熱烈な歓送に応え、夢と希望を抱き、満蒙開拓青少年義勇軍という美名のもとに、内原訓練所に入所、時に十四歳の少年、ここで約四十日の精神教育と開拓訓練を終え渡満、鉄の戦士と、もてはやされ、東京市内をリュックサックに鉄の柄一本肩にして、勇ましく市中行進、靖国神社の石段、明治神宮の玉砂利を踏む。厳肅な音、今も記憶は確かだ。そして新潟港に集結、父が富山から見送りにやつて来てくれた。ドラの音、日の丸の旗、別れのテープ、涙の別れと共に満州丸という小さな汽船が私共を日本の陸地から離れさせたのであった。

寧安大訓練所に入所、アンペラ小屋、五、六棟草むらの中にわれわれを迎えた。これが私の第八中隊（堀口中隊）である。全く期待はずれ、夜はアンペラをと

おして星空、狭いせんべい布団、ここに長旅の疲れを
いやす。第一夜を送った翌日からいよいよ本分の開
拓事業に取り組むことになるのだが、まず宿舎を建て
ねばならない。毎日がその作業ばかり、学科も教練も
そっちのけ、義勇軍か労務者か、それとも職人かわか
らぬ毎日だった。私も年少者はトビーズの土作り
や、野草集めが主な仕事だった。年長者には大工、左
官の経験者もいて、主役をつとめ、采配をふるって能
率をあげたものだった。

さて一方、警備も主要な役割だが、年少者には歩哨
という役は与えられなかったが、九月頃順番がまわっ
てくるようになり、当初は二人で立つことになったが、
身の丈ほどの小銃は重く、一寸先も見えぬ暗闇、狼の
遠吠え、高粱、もろこしの葉のすりあう音にも怯える
ばかりの二人歩哨、怖さと震えの長い長い一時間で役
立たずの歩哨だった。

こうして警備と作業の毎日だったが、雨が降れば、
土の家造りのために休養を取って、内地への便りやら
心の和らぎを保った、うれしい休日もあった。こうし

て大陸の風土と戦い、幾多の試練に耐えて、再び移動
することになるが、この間非常に多くの赤痢患者が統
出した。充実した病院も無く、ついに多くの犠牲者を
出したことを忘れてはならない。若い身空で他界、彼
等はわれわれにも大きな教訓を残してくれた。この寧
安の地を一年余りで浜江省茸河県平陽甲種訓練所へと
移動、ここでは当初仮宿舎等で生活していたものの、
しだいに煉瓦造りの耐寒性の宿舎が満人の職人やそれ
にわれわれが協力して完成し、ようやく義勇隊訓練所
らしさを整えてきた。

一方、学業や、技術と多種にわたって修得して、立
派な開拓士としての基礎作りを学ぼうと訓練期間後半
にかけて一生懸命だった。三年の年月が過ぎ、訓練の
修了証書を手し、第一次平陽義勇隊開拓団という特殊
な開拓団として移行、ようやくこの地を埋骨の地とし
て情熱に燃え、理想郷づくりに頑張ろうという心構え
になりきった遅咲きの開拓士の一員だった。

その後、実験隊と称する研究試験グループが組織さ
れ、その一員として抜擢され、畑作専門で、あらゆる

作物野菜を試作研究し、当時とすれば、近代的農機具トラクター、麦の刈取機、脱穀機等を取り入れ、在来農法の革命を計ったものだった。二十名の若者が挑戦し、実績をあげ、表彰されたこともあったが、太平洋戦争の激化と共に団員は召集され減少の一途をたどり始めた。年少者だったわれわれにもその時が来始めたのであった。残された団員は終戦時には四十余人と聞く。

昭和十九年十一月、私は歩兵として現地シベリア近くの綏西に入隊。見送る人は一人もいない最後の平陽の地をあとにした。

翌年四月、幸運にも朝鮮の済州島に転属、ここで終戦の日を迎えたのであるが、満州のこと、すなわち平陽のことや、ソ連軍の侵入のこと等情報はいっさい知らされず、除隊後は必ず現地に帰り、再び開拓団の一員としてみんなといっしょに本格的に頑張る覚悟でいた筈が、しだいに情報が入り、それはとてもおぼつかぬこと。

大陸の夢は泡沫と消え去り、はかない運命となって

しまった。ただ、あの大陸から持ち帰った不屈の精神のみが今日の私を育ててくれた大きな土産物と信じ、あらゆる事柄にも取り組んでいます。

青春の想い出

岐阜県 森 下 虎 男

昭和十四年四月、氏神様の桜が美しく咲きほこっていました。満蒙開拓青少年義勇軍のタスキに真新しいカーキ色の青年服、そして戦闘帽、キャハン姿の四歳の私はいまは亡き友の梶村一幸と二人で氏神様の正面に立ち、おはらいを受け、出征兵士を送る時と同様、幟を先頭に五百メートル近い沿道を駅まで、駅前には村の人達が私達の送別のため多数来ておられました。

愛知県追進農場で一週間の予備訓練を終え、内原訓練所へ。初めて体験する団体生活が始まり、何千人かの若人が、満州開拓の希望に燃えて声高らかに、弥栄